

これまでの東日本大震災復興支援事業の派遣実績

平成24年度 宮城県 田口明子

さんのお
担当遺跡：山王遺跡（多賀城市）高速道路建設に伴う調査

宮城県は太平洋側に面する広い地域が大きな被害を受けました。震災翌年の派遣で、物資運搬のための高速道路建設に伴う調査を担当しました。山王遺跡は、宮城県の古代史を語る上で、もっとも重要な遺跡の一つで、様々な期間短縮のころみにより復興の推進と埋蔵文化財の保護の両立が図られた発掘調査となりました。



南三陸道と山王遺跡

平成25年度 宮城県 保坂和博

にいだたてあと
担当遺跡：新井田館跡（南三陸町）高台移転に伴う調査

南三陸町は、津波の甚大な被害による人口の流出のため、現在は震災前の8割程度の人口しかありません。

担当した新井田館跡は、移転先の中心部の高台にある15世紀の山城です。山城全体の調査は全国的にも珍しく、現地説明会には町民を中心に300名を超える見学者がありました。



法面の調査のようす

平成27年度 福島県 吉岡弘樹

みなみえびみなみまち なかじまで
担当遺跡：南海老南町遺跡・中島館跡ほか

福島県は、津波被害に加え、福島第一原発による被害のため、他県と比べて復興が遅れています。

南海老南町遺跡は、古代、中世の集落跡です。震災前に多くの人が居住していたこの地域は、古代・中世も賑わった場所でした。



南海老南町遺跡での調査風景

平成28年度 福島県 柴田亮平

担当遺跡：県事業：確認調査4件ほか

市町村事業：本調査1件・試掘調査3件ほか

震災から5年が経ち、福島第一原発事故の影響のため、復興が遅れています。流されてしまった防災林や寸断された道路が復旧されていない場所もあります。この1年間で約36遺跡の調査に関わり、中でも古代の製鉄関連遺跡の分布調査を多く行いました。



南相馬市の試掘現場にて

平成26年度 岩手県 今福利恵

担当遺跡：町方遺跡（大槌町）盛土による区画整理・堂の前貝塚（陸前高田市）高台移転造成

支援3年目の岩手県では、復興が本格化して高台移転が開始された年ですが、地方自治体により復興の進捗にばらつきがありました。堂の前貝塚は縄文時代中期の遺跡です。山梨県の豊かな縄文文化と比較するよい機会となりました。



堂の前貝塚遺跡見学会

平成23年3月11日に東北地方を襲った巨大地震は、はるかに離れた山梨の地においても経験したことのないような大きな揺れで、異様に長く感じられた。また、広範囲に及んだ停電で信号がとまり、家々の明かりは消えて真っ暗な夜を過ごしたことを記憶している。

地震災害に加え、津波被害を受けた災害現地では、それがいかに凄まじいものであったか、災害3か月後に宮城県の石巻と亶理町に文化財レスキューで入った私自身が身をもって感じるこ



宮城県南三陸町（2013）

の確保さえままならないような被災地での特殊な環境の中で、全国から支援に集まった混成部隊の中で遺跡の発掘調査が進められたと聞く。こうした状況の中、埋蔵文化財がもつ意味、なぜ埋蔵文化財の調査を行う

ることであることを被災地の方々が感じ取っていたからである。人と人の絆をつなぐかけがえのないもの、それは地域の歴史であり、文化であり、アイデンティティの根幹に文化



岩手県大槌町（2014）

東日本大震災復興支援事業が山梨にもたらしたもの

山梨県埋蔵文化財センター所長 中山誠二

とができた

本埋蔵文化財センターでは、文化庁の要請を受けて、翌年の平成24年度から28年度まで5カ年にわたり、5名の文化財専門職員を派遣して、復興支援にあたってきた。派遣職員各自が、現地の惨状を目の当たりにし、自らの意志を奮い立たせて復興支援に赴き使命を果たしてくれたことに、改めて感謝すると同時に、その勇気に誇りを覚える。

復興支援では、交通手段や宿泊施設



宮城県多賀城市（2012）



宮城県南三陸町（2013）

必要があるのかを、それに係わるすべての職員が、改めて問い直す機会となったことは間違いない。報道などにおいても当初、復興の妨げと揶揄されたこの文化財調査であるが、復興の進展とともにこの見方が大きく様変わりした。それは、地域のすべてを失った人々にとって、「復興」とは単に失われた住宅を再建し、インフラを再整備することではなく、地域コミュニティそのものを再生す

財がある。派遣職員が被災地におけるこの意識の変化を感じたと異口同音に話してくれた。また、発掘調査を通じて、作業員同士に新たなコミュニティが形成されたともいう。

調査研究の面でも、山梨県では調査経験がない貝塚や大規模な製鉄遺跡などを、全国各地から集まった専門職員と意見を交わしながら進めたことは、それぞれが一生にわたって残る貴重な体験であったと語ってくれた。

地震大国日本に暮らす私たちにとって、この災害は他人事ではなく、まさに自分事に他ならない。今回の復興支援の経験は、将来起こりうる災害に対応するための貴重なノウハウと、文化財の意味、大切さを改めて私たちに教えてくれたのである。

宮城県では、作業に参加していた地元の方々に心身ともに支えられました。現在も1年に1度くらいの割合で多賀城市を訪れています。山梨県とは異なった風土や習慣を知ることができたことは、よい経験となりました。（田口）



作業員のみなさんと

津波で何もかも失ってしまった地域で、次に歴史や文化財が地域の誇りとしてコミュニティの中心になっていくのを目の当たりにしました。

発掘調査の成果である埋蔵文化財を「今に生きている我々にどう活かすのか」という視点は、県内の発掘調査でも必要だと感じました。（保坂）



新井田館見学会のようす

県外での発掘調査では、いざ災害が起きた時の対応や復興体制についてなどのノウハウを学ぶことができました。他県から派遣された職員と情報交換することで、県を超えた幅広い視野で物事を捉えることができました。（今福）



調査の合間に

福島県は福島第一原発の事故のため、まだ各地に震災の爪痕が残されています。このような厳しい環境に身を置き、発掘調査を進めることで、精神的にも鍛えられました。派遣された責任の重さを実感し、積極的に業務に携わることができたことは、今後の業務にも活かすことができると考えています。（吉岡）

他県の職員と一緒に調査を行うことで、調査方法や工程管理などについて積極的に意見交換を行い、自分のスキルが高まりました。また、山梨県では調査したことのない横穴墓や製鉄遺跡の調査を通して、今まで着目しなかった場所の土地利用などについても気にする必要性を感じました。（柴田）



浪江町の土砂採取現場にて